

冒険から生まれる体験教育

木谷 尚史

日本アウトワード・バウンド協会

本題にはいる前に、私事で大変恐縮ですが、今から約10年前に、私の冒険体験について、ある雑誌に書いた文章を引用したいと思います。

“私の生まれは兵庫県の村岡という、小さな田舎町で、中学二年までそこで過ごしました。小学校二年の冬、たしか昭和二十二年だったと記憶するが、雪の朝登校途中に新しいウサギの足跡を見つけ、誰かが「おいかけよう」と声を掛けた。数名が同調し、当然私も仲間に入っていた。しばらくは小走りで追っていたが、やがて足跡は山の中に入り、だんだんと歩行が困難になっていった。

長靴の中には雪がいっぱい入ってグショグショになり、下着は汗でびしょり。しかし誰も引き返すとは言わない。私自身はウサギはともかく、始めてみる景色に目をみはり、あの森の向こう側はどうなっているのか、あの山の向こうは・・・と、移り変わる風景に非常に興味を覚えた。

ゆけどもゆけどもウサギの跡は続き、とうとう追いかけるのを止めた。その時、皆はハッと我に返り、一目散に学校に引き返した。すでに授業は始まっており、担任の中村先生にお目玉をいただいた。ウサギの足跡を黒板に書かされたり、罰として、しばらくストーブの前に立たされた。しかし、これは今思うに濡れた衣類を乾かすための先生の暖かい配慮であったのだろう。

これが、私の記憶している、初めての冒険らしい冒険である。もともと山を歩いたり、川や海が好きであったためか、学年が上がると共に行動する範囲がだんだんと広がり、田舎の主だった山や川には殆ど足を踏み入れた。

終戦直後の食糧難の時代であったので子どもながらに、山の木の実を採ったり、川で魚を取ったりすることを一つの仕事のように考えていた。

その後、現在に至るまで私なりのアドベンチャーは数え切れないほどやってきた。そんなに華や

かなものではないが、私自身、自然界に対するいろいろな感覚を鈍らさない為にも、自分の能力の範囲で冒険をしつづけてきた。それは一つの訓練であり、時にはレクリエーションでもあり、さらに、子どもの頃より持ち続けている未知なるものへの憧れのようなものである。

数年前、アウトワードバウンドのトレーニングで、六月の有雪期、北アルプスの雪倉岳から朝日岳を経て黒部支流に下りたことがある。この時、途中で道を失い谷底まで続く非常に危険な雪渓を下ったり、急峻な尾根を登ったり下ったりし、辛うじて谷を下りきったところ、大きな黒部支流にぶつかった。増水した雪解け水は零度に近い冷たさで、胸まで浸る急流であった。五十メートル程の渡渉であったが、この時ほど必死になって生への執念を燃やしたことはなかった。

何人かが流されるというハプニングはあつたが、互いに協力しあい、全員無事渡り終えた時の安堵感と満足感は今も忘れることが出来ない。”
・・・「私にとってアドベンチャーとは」学校体育：55-5-56. 8. 1980.

大学を卒業し、いったんは企業へ就職したが、数年後には北アルプス白馬山麓、梅池高原でスキーロッジ（青年の家）の仕事を選んだのも、子供の頃より持ち続けていた冒険心、大自然への憧れの影響と思われる。

昭和四十二年から約二十年間、ロッジを運営しながら、そこで、数え切れないほどの体験をしました。

人間、自然、環境、そしてその三者の関わりなど・・・

大自然の美しさ、優しさ、厳しさ、恐ろしさ、そして、四季折々に移り変わる様相。早春の芽吹きから始まり、新緑から鮮やかな紅葉へ、そして、木枯しと共に落葉していく姿は、まさしく生

き物であります。花に於いてもしかり、鳥に於いてもしかり、どんなに小さな動植物とて、決して同じ状態にとどまることがないほどに変化をしています。

そのような大自然の営みを実際に目で見、手で触れ、鼻で嗅いだ時、人間はいったい何を考えるのでしょうか。恐らく普通の人であれば、感動を覚え、さらに他の物への興味を覚えるに違いありません。

二十年間、そこで多くの人と出会いました。そして、訪れた人々には、極力自然と接触し、自然の中で活動をするように勧めました。

人間は自然の中に在るとき、何故か非常に素直になり、人に対して優しく、オープンマインドになります。恐らく、雄大な大自然のなせる業だと思えます。

また、自然への興味は、ただ見ることから一歩自然の中へ踏み込み、その中で生活をし（キャンプ）、更に、新しい未知なる自然を求めて行動を起こす（冒険）までに発展していきます。私自身、訪れた人達と何度となくキャンプをし、登山、ツアースキー、アルプス縦走等、多くの冒険もやりました。

これらの体験を通し、多くのことを学ぶことが出来ました。自然は生き物です。美しいときもあり、反面、人を寄せ付けないほどに厳しい姿を現すこともあります。そのような状況の中で生き抜くためには、勇気と、努力と、不屈の精神が必要でしょう。そして仲間同志で、互いに助け合い、協力しあい、信頼し合うことも大切です。

“冒険とは、常に身の危険を感じながら行動することである”。それだけに一つ一つの行動に対する姿勢、これから先起こりうることにに対する予見、危険に対する配慮、グループ内での自分の役割と責任等、非常に難しい状況だけに、その目的を達成したときの感動は言葉では言い表せない程大きく、各人が、そこから多くのことを学ぶのです。冒険こそ何よりも優る体験教育だと思います。

現在、私はアウトワード・バウンドスクール（OBS）を運営しておりますが、その活動について紹介します。

1. OBS とは

OBSは大自然の中で個人又はグループ単位でいろいろの野外活動（スポーツ：登山、スキー、ロッククライミング、カヌー、ヨット、マラソン、XC、他）を体験しながら、新しい自分（潜在能力など）を発見し、又、他者に対する気遣いとか人間関係の大切さを理解し、更に、正しい価値観、奉仕の心、そして、人間の美しさ、尊さなどを学ぶ学校です。

大自然は、時には人間に厳しい一面を見せたり、時にはこんな所が地球にあるのかと思わせるような素晴らしい景観を呈することもあります。刻々と移り変わり、予期せぬ事態が起こりうる要素を十分に持ち合わせている自然条件の中で、参加者は、その直面した課題に対し、いかに正しく、俊敏に、かつ果敢に立ち向かうことが出来るのか、自らそのような体験をしながら先に述べたようなことを学習していきます。

2. OBS の歴史

OBSは、1941年、第二次世界大戦の最中に、イギリスのアバドベイで生まれました。

その目的は、若者を心身共に鍛えることでありました。何故かと言えば、戦時下に商船や海軍の乗組員のうち、生きて帰って来るのは年寄りばかりで、体力的には優っているはずの若者がことごとく命を落としていることに注目し、若者にどのような状況下に於いても生き抜く気力と技術を学ばせる必要があると考え、ある商船会社の援助のもとでこの学校が生まれました。

戦後もこの学校は青少年の健全育成に素晴らしい効果があると認められ、イギリス国内はもとより、アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア、カナダ、ナイジェリア、アジアでは香港、マレーシア、シンガポールなどに広まり、現在は約20ヶ国、40校が運営されており、イギリスのフィリップ殿下がその総裁となり現在に至っております。

日本に於いては、1974年、日本青年会議所によって紹介され、活動が続けられて来ましたが、

1989年、長野県に常設校を開校し、コースが開かれております。

3. OBSの理念

このOBSのカリキュラムを担当した人が、Kurt Hahn博士と云い、ドイツ生まれのユダヤ人でした。

博士は、当時（1920年頃）のドイツ社会の荒廃ぶりを憂い、文明社会の発展は人間性の欠如を招き、若者に夢を見ることを忘れさせ、ヒューマニズムに感動することも忘れさせている。従って、若者に自分の力で地域社会を良くする力を持たせ、責任感ある実行型の市民を作り出すことが必要である。更に、教育は知的教育より性格教育（体験教育）にもっと力を入れるべきだと主張しました。

そして、博士は修道院の一室を借り、学校を開きました。1934年、イギリスに亡命して、同じような学校を作り、約30年間に渡っていろいろな体験教育を実践しました。

- ・自主健康管理
- ・自給自足（農場、牧場）
- ・自治的社会的確率（級長、学級委員等）
- ・スポーツの強化（心身の向上、チームワーク）
- ・ギルド制度（個人の才能をのばす）
- ・自衛団の結成
- ・冒険旅行（フィンランド湖への探検旅行）→教育効果
- ・奉仕活動（山岳救助隊、海岸救助隊、消防隊、コミュニティーサービス）

これ等の活動の中に一貫して流れていた Kurt Hahn 博士の教育哲理は

- ①人間は劇的な経験をすることにより、人間の強さ（素晴らしさ）を知る。
- ②大自然の中で自分自身で困難なことをやり遂げることに、自信をつける。
- ③経験によって得た自信が、ひいては他人への思いやり、又、社会への奉仕へと変わって行く。
- ④共同生活での協力、助け合によって他人への奉仕の喜びを感じるようになる。
- ⑤他人に対する純粋な奉仕は、自分に対する誇り

となる。人間的な美しさ、人間の素晴らしさ、生命の尊さが養われていく。

博士は、以上のような手法と教育理念を、このOBSに組み込み、“奉仕・努力・不屈”を基本理念とし、カリキュラムを作ったのです。

4. 日本のOBS

1974年に始めて日本で実施されてから約17年になりますが、1989年、常設校開設に踏み切った背景には、やはり1920年代のドイツ社会と同じ様な社会情勢が日本にも見られたということです。

例えば、

- ①親子の触れ合い、師弟のコミュニケーション；組織内のチームワークなどが希薄になっている。
- ②管理社会に慣れきり、自分の持っている可能性を発見する機会が少なくなり、自己管理の出来ない人が多くなっている。
- ③日常の様々なストレスの蓄積を、いかに発散し、リフレッシュするか、そのコントロールが出来ない。
- ④知的教育の氾濫により、人間として大切な部分である体験教育が見失われている。
- ⑤人間と自然との直接の触れ合いが段々と少なくなり、本当の自然の姿、自然の素晴らしさ、そして、自然からの恩恵を忘れつつある。

以上のような実情を鑑み、日本アウトワードバウンド協会は自然の中で野外活動、冒険プログラムなどの体験をしながら、人間性の回復を目指す、OBS活動を展開しております。

活動の場として、自然を媒体とする理由は皆様おわかりのように、自然は人間を浄化し、人間の情操を行うに最も適した環境だと確信しております。雄大な山を眺め、美しい花を見、きれいな鳥の声を聞いた時、感動しない人はおりません。その時、人間は自然の中に溶け込み、人間の本来の姿に戻るでしょう。そのような状態の時に得た体験こそが知育では得られない大切な部分なのです。

OBSの目標としては、

- ①野外活動（ライフ）の楽しさを学ぶ。
- ②心身のリフレッシュとヘルスケアの機会を得る。
- ③人と人との触れ合いの場を作り、コミュニケー

ジョンを図り、奉仕精神の大切さを学ぶ。

④人間（各自）の持っている隠れた能力、可能性を発見する。

⑤自然と肌で接し、自然の素晴らしさ、自然の本当の姿を認識する。

を掲げ、より効果のあるプログラム開発を行っています。

5. 環境問題

いま“環境”については全世界の国々が大きな問題として取り上げており、その対策のために莫大な人、物、金が費やされています。環境破壊により、いよいよ人間生活への影響が報道されるにいたり、われわれも他人事ではないという意識を持ち始めた次第です。

マクロ的にはフロンガスによるオゾン層の破壊とか、熱帯雨林の乱伐による温暖化現象などですが、これらの問題は、われわれが論ずるには余りにも大きな問題ですので、今日は我々野外活動に携わるものが接している、もっと身近な自然環境について考えたいと思います。その身近な自然の事を考え、理解を深め、その自然を守っていくことが環境教育の基本であり、ひいては、地球環境を守る大きな力になるものと確信致します。

現在日本では、皆さんご存じの通り、リゾート開発の名のもとに、スキー場、ゴルフ場、ペンションなどがどんどん造られ、更に、都市近郊では、住宅地造成により、緑地が急激な勢いで破壊されています。自然はその生態系の平行状態により、外からのインパクトに対して抵抗力を持ち、局所的な破壊を受けても、徐々に元の平行状態に回復する力を持っていますが、日本各地で実施されているように、その破壊が限度を越えると回復は困難になり、大気、水、土などの環境条件の急激な変化を引き起こします。

長い歴史の中で“文明、文化は自然破壊と共に発達し、その文明、文化が頂点に達して初めて自然保護へ目が向けられる”と言われております。

最近、環境教育、エコロジーという言葉がいろんな分野で使われるようになってきました。日本もやっと自然保護へ目を向ける時がきたのだと思

います。ちなみに、ヨーロッパではすでに200年前にその経験をし、自然に対する意識は、数段高いものを持っています。

少し自然について考えたいと思いますが、いま、なぜ開発反対の声が高くなり、自然保護、環境教育の必要性が叫ばれているのでしょうか。なぜ、人間にとって自然は必要なのでしょうか。残念ながら、まだ科学的な数値として、それははっきり立証されておりません。

しかし、ただ、自然は大切だ、というだけでは説得力が在りません。

我々がキャンプ地を選ぶに当たり、都会の雑踏をさげ、山があり、大きな森があり、きれいな小川が流れているような場所を選び、そして、極力、自然を壊さないように務め、自然を残そうと努力します。今、そのことをもう一度振り返り、なぜ、そういう場所を選んだのかをよく考えたいと思います。

自然破壊による災害について学ぶことも必要でしょう。又、環境汚染が我われの生活にどんな影響を与えているかを知ることも必要でしょう。しかし、もっと大切なことは、美しい自然の中に連れてゆき、自然の素晴らしさを体験させることだと思います。幸い、日本には四季があり、四季折々の美しい自然がいっぱいあります。そんな環境の中で鳥の声を聞き、満点の星空を眺められるだけで人々は感動し、心和み、精神的な安らぎが得られるものだと思います。そんな素晴らしい自然の中で、ハイキングをしたり、スキーをしたり、キャンプをし、友と寝食を共にし、友と語る時を持てるなら、これほど素晴らしい人間教育の場は、他にないと思います。これこそ素晴らしい環境教育だと思います。

OBSは、先ほどより申し上げておりますが、活動のフィールドは自然です。そして、自然が与えてくれる効果は、計り知れない大きなものがあります。自然は我々の活動にとって、大切なフィールドです。従って、どんな活動をする時に於いても、人間も自然界の一員であることを自覚し、自然に対し、常に意識を持ち、自然を守り、保護する気持ちを参加者全員が持ちながら具体的な手法

を守っております。このことは世界中のOBSが取り組んでいる問題です。

(1)自然を肌で感じる(本当の自然を知る)。

本、テレビなどのメディアを通して、外から自然を知ることにはできるが(自然のアルバム、野生の楽園、すばらしい世界旅行等)・・・

①テントなしで外に寝る。外気、夜の物音、満天の星

②一人一人、山中で過ごす。大自然の中の自分

③天候に関係なく、プログラムを行う 自然の姿(雨、雪、風)。

ややもすると、装備の開発が進み、快適さが優先し、自然の厳しさをシャットアウトしている傾向がある。

(2)ローインパクトキャンプの徹底。(特に森林限界より上では)

キャンプサイト	指定地を使用する。 石を動かさない、大声を上げない。→生態の変化をさせない。 イギリスではキャンプ設営のための石は、湖水から運んで使用し、終わればまた湖水に戻す。
火の使用	薪を使用しない。風倒木を使用する。(コロラドの例) ガス、液体燃料を使用する。
道の歩き方	新しいルートはつけない。
排出物の処理	20cm以上埋める、トレベは使用しない。 森林限界以上持ち帰り。 コロラドのラフティングプログラムでは排出物はすべてビニールの袋に入れて持ち帰る。
残飯	持ち帰り。残すと他の生物が食べる。
排水	浸透、まき散らし。
水の使い方	飲み水のみを使う。(イギリスの例)
石鹼	使用しない。

(3)自然保護運動の推進

地域のプロジェクトに積極的に参加し、運動をしていく。

例：植樹

コミュニティーサービス ゴミ拾い、河川の清掃、他

野外活動を通じて、自然に親しみ、自然の素晴らしさを知り、自然の仕組みを理解することが、将来、自然環境を守る大きな力(基礎)となると確信します。

以上OBSの紹介をしましたが、改めて、冒険教育の大切さを主張し終わりとします。

